

## 【研究室だより】

## 英国・英語圏文化研究室

教養・基礎教育部門  
江口 誠

## 一. はじめに

2020年4月に近畿大学産業理工学部に着任致しました。どうぞ宜しく願います。教養・基礎教育部門に所属し、学部全体の英語教育を担当しております。それと同時に、経営ビジネス学科の一員でもあり、今年は3年生のゼミを担当することになりました。

私はお隣佐賀県の唐津市という小さな街で生まれ育ちました。高校の英語教員を目指して学部では教育学部に進学しましたが、そこで興味を持ったイギリス文学の研究をさらに深めようと考え、大学院では文学研究科に進学しました。大学院の博士課程修了後は、まず高専で英語教員として教鞭を執る機会を得て、その後、愛知教育大学と佐賀大学で勤務し、この度近畿大学でお世話になりました。

## 二. イギリス文学

「英国・英語圏文化研究室」という名称をつけましたが、私の専門はイギリス文学です。その中でも特に19世紀初頭のロマン派詩人ジョン・キーツ(John Keats, 1795-1821)の作品と当時の文化との関わりについて研究しています。イギリス・ロマン派詩人といえば、ワーズワスやコールリッジなど第一世代と呼ばれる詩人たちが有名かもしれませんが、キーツは伝統的なイギリス文学史に於いてはバイロンやシェリーと同じくフランス革命頃に生まれた第二世代の詩人に属します。ただ、キーツが他の詩人たちと決定的に異なるのは、彼だけがオックスフォード大学やケンブリッジ大学では学んでいないという点です。そのため、当時、文芸人の素養として必要とされていたギリシャ語の知識がなく、文壇からその点を厳しく追及されました。「詩作は辞めて、(それまで彼が学んでいた)医学・薬学の道に戻った方がよい」という辛辣な批判さえ受けたほどです。結局のところ、キーツはバイロンのように成功することもなく、結核のため25歳という若さで夭折します。しかしながら、死後になって評価が高まり、今ではイギリス・ロマン派を代表する詩人の一人として認識されています。

現在は、キーツが幼少の頃に受けた非国教徒の教育が彼の作品に与えた影響という観点から研究を進めています。キーツが幼少期に通っていたクラーク学校では、当時と

しては革新的な教育理念と教育方法を実践しており、例えば1781年にウィリアム・ハーシェルが発見した天王星といった最新の科学知識をいち早く教育に取り入れていました。そして、彼が得たそれらの科学的な知識や思考が、彼の作品に影響を及ぼしているのではないかと考えています。

## 三. ICTを活用した英語教育

これまで英語教育に長年携わってきたこともあり、特にICTを活用した英語教育についても様々な手法を取り入れ、さらに研究を進めています。eラーニング学習は使い方によっては大変便利なツールです。しかしながら、これまでの私の研究と経験から得られた知見からすると、特に習熟度や動機づけが低い学習者にとっては、拙速なeラーニングの導入は逆効果となる可能性が高いことが分かっています。従って、そのような学習者に対するICTの導入については慎重に進める必要があります。

動機づけは学習者の自発的な取り組みを促す上でとても重要な視点で、例えば「外発的動機づけ」と「内発的動機づけ」という概念は有名かもしれませんが、理想的には、賞罰によって学習意欲を促すような外発的動機づけによる英語学習から、英語を学ぶこと自体を主体的に楽しむような内発的動機づけによる英語学習へと導くことが肝要です。その意味において、習熟度が高い学習者にとってeラーニングはとても効果的なツールとなり得ます。しかしながら、習熟度や動機づけが低い学習者に対しては、まずeラーニング学習そのものが楽しいと感じてもらうための様々な「仕掛け」が必要となります。例えば、ゲーム的な要素を多く取り入れたようなスマホの語彙学習アプリや正解数を参加者全員で競うようなクイズ形式のアプリなどの利用を誘い水として、そこから英語による異文化コミュニケーションの楽しさや英語を学ぶこと自体の楽しさを実感してもらい、自発的に英語学習を行うように導くべきだと考えます。そして、それらの実践の教育効果を見極めるため、事後アンケートを実施したり、TOEIC等で得られたスコアとの相関などから様々な分析を行ったりして、さらなる授業改善と研究を行っています。

## 四. 最後に

近畿大学産業理工学部赴任後も、これまで同様、上記の2つの分野での研究を進めて参りたいと思っております。慣れないことが多く、至らぬ点も多々あるかと思いますが、どうぞ宜しく願います。